

視点

今年4月、甘楽町に新たに甘楽中学校が誕生しました。織田家小幡藩の城下町景観が色濃く残るこの町にふさわしい立派な門、なまこ壁、福島瓦に、町産材が使われた木の香りあふれる教室など「甘楽町に生まれたらこんなすてきな学校に通えるんだ」と憧れながらそばを通勤しています。

今まで世界30カ国余りの国を訪れましたが、どんな国でも子どもは地域の宝、学校は地域の誇りです。海外の人を日本の学校に案内して特に驚かれるのが学校給食。その充実したメニューには皆感心します。この学校給食、実は甘楽町が日本で初めて導入したことを「存じますか。」

1932(昭和7)年、全国に先駆けて福島尋常高等小學校で給食が始まりました。34年に同校へ入学した茂木竹雄さんによると、ご飯は弁当につめて各自持っていく、おかずが給食として提供されたそうです。調理場で係の男性2人が調理し教室まで運んできてくれた。海藻や魚が中心のメニューでたまに肉も出た。「めいめいにお皿があつて、当時としては珍しく整った献立でおいしかった」、食べる前には「箸とらば親と祖先に感謝します。いただきます」と皆で合掌したと当時の思い出を鮮明に語ってくれま

した。給食費は一人月15銭。給食に使う野菜は農業実習地からも供給されていた。

日本は明治以降、さらに教育に力を入れ、「西の岡山、東の群馬」と言われるほど両



甘楽町天引

もり えりこ
森 栄梨子

NPO法人自然塾寺子屋事務局長

思い出を地域の誇りに

茂木さんには、給食の他にも学校の話がたくさん聞きました。全校児童820人で毎月歩いて行った笹の森神社へのお参りが楽しかったこと、45分間の授業の終わりを告げる鈴が鳴るたび、一斉に校庭に飛び出し上級生下級生が一緒に遊んだこと、修学旅行の積み立てのために毎月おじいさんから10銭もらい貯金していたが戦争騒ぎでそれどころではなくなったこと…。

統廃合によって閉校した校舎の再利用が全国で行われています。美術館や喫茶店、ホテルに使われている例もあります。当団体も甘楽町秋畑の秋畑小那須分校をたびたび使わせていただきます。木造の立派な校舎で、一歩踏み入れただけで当時の茂木さんのような少年少女が学び遊んだ光景を感じ取れます。卒業生のこうした思い出は消えることなく募るばかり。学校は単なる校舎ではなく、いつの時代も思い出がつまった心のよりどころ。そんなことを思いつつ、われわれも守って引き継いでいきたいと思います。

新甘楽中学校にも、未来を担う子どもたちがこれからのたくさん通い、たくさん思い出をつくり町の新しい誇りとなるでしょう。甘楽つ子、いっぱい学び、丈夫に育ち、未来へ羽ばたけ！

県はたくさんさんの小学校をつくらせたのですが、この福島小の学校給食からもいかに教育や丈夫な子どもの育成に取り組んだかがうかがえます。

学校の誕生

【略歴】京都府出身。嵯峨野高卒業後、米国留学。国際交流に携わり、ホンジュラスで青年海外協力隊員を務めた。2014年から現職。県と甘楽町の地方創生懇話会委員。